

目的 第1報において婿養子の量的側面と、どこからどのような人が婿にくるかという質的側面について明らかにしたので、今回は、婚家における婿の内部構造について明らかにする。

方法 1979年及び80年にわたり県内4地区の20代～40代の婿養子275人を対象に、郵送法による無記名記入の質問紙を配布した。回収率36.3%。有効数100について、地区別、年代別、農家・非農家別、専・兼別、円満家庭・不和家庭別に分類し、更に1978年に嫁姑関係について同様方法で実施した23名の嫁に対するアンケート調査結果と、一部対比して分析した。

結果 婿は結婚後1年以内に約80%が養子縁組をする。その結果40代では、約半数が農地名儀をもつが、嫁の場合養子縁組は皆無である。婚家における婿の役割意識は、夫婦の生活を大切にか80%、次いで親の扶養ならびに家業をつぐが50%台である。年代別では、30代後半から40代にかけて世代交替が行われ、権威・役割構造などに逆転傾向がみられる。全体の約85%は円満家庭であるが、家族員相互の関係は「姑と婿の妻（母娘）」「婿とその妻」「婿と姑」はいつでも良いが、「婿と舅」「舅と婿の妻（父娘）」「舅と姑」では、うまくいっている者の割合が少ない。不和家庭の傾向としては、家族数が多くその構成が複雑であり、婿・舅間の性格の組合せに問題がみられる。又婿の自由時間やこづかいの満足度は低く、労働の負担感は大きい。余暇の過ごし方では趣味をもちず、ごろ寝、テレビ、酒などが多く家族からの解放を求めて出稼を希望するものが多い。しかし不和家庭においても、婿が妻の立場に理解と思いやりを示しているものが、約半数ある。